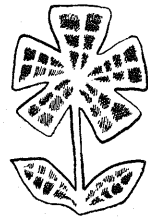


# 三歳児との出会い

— 大切にしたいと改めて思うこと —



上坂元 絵里

二年間共にすごした年長児を送り出し、五年ぶりに三歳児二十人との生活が始まった。久しぶりの三歳児の担任、幼稚園生活を一から始める心新たな気持ち、どんなふうに関わればいいのかという不安、一人ひとりを大切にしたいという願い、様々な思いを胸に抱いていた。

保育者の感覚を切り替える

年長の三学期、園庭を一周するリレーが流行っていた。私が真剣に走ってもかなわないほど、子どもたちは走るのが早くなっていた。二週もすると息があがってしまう私をよそに、何週も走る子

どもたち、大きくなったたくましさがまぶしくさえ感じられた。

そして四月、三歳の子どもたちは、手をつなぐときについ腰をかがめてしまうほど小さい。ゆっくり歩いていくつもりでも、気がつくと手をつないだまま、足がからまったようになってずりつとよろけている。『何もないのにつまずいている。

むむ、まるで私が転ばしたよう』と焦る。普通に歩いていても私のペースについて来られず、必死で追いかけて歩いてくるH夫やK子。『もつとゆっくり動かないと子どもたちは大変なんだ』と気づく。逆に、とても出来ないのではと思うことをどんだんやってしまう姿に出会うことも、例えば、体と同じくらい大きないすを庭に運び出してしまったり。

ちよつとした場面で、自分が予想していたのと

感覚のズレを見出し、その度に修正することが続いている。過保護にするわけではないが、必要なことは手を差し伸べ、自分でできることには手を出し過ぎないようにと手探りの毎日。頭では考えて切り替えているつもりでも、身体感覚はなかなかついていけないということか。幼稚園で生活する二年ないし三年間の子どもの成長の大きさを改めて感じている。

#### 言葉を発するまで

入園式の日、A夫は遊戯室に移動してしばらくたってから、いよいよ耐え切れなくなったのか泣き出した。最初の印象は『身体は大きいけれど、とても不安そう』だった。初日は、庭へ出るのをきっかけに母とは何とか別れる。うさぎ小屋でうさぎを見たり、花壇のチューリップにジョーロで

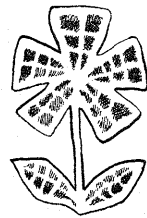
水をあげたり、保育者にくつついて過ごした。二日目、私を引っ張って行きたい方向を指さすようになる。おかえり前にトイレに行ったとき、急に泣き出し、不安だけれど頑張って持ちこたえているのだなと推測された。三日目、花壇を指さし首をかしげる。チューリップが水の重みで傾いたのを伝えたかったようだ。「チューリップがこうなっちゃったの?」と私も首を傾けた。ジェスチャーが愛らしく、私も彼の表現に倣って応えていた。

このようにA夫との関わりは、非言語的コミュニケーションから始まった。貝のようにつむった口元、訴えるような表情がA夫の緊張を伝えていた。数日後「先生、あっち」と言うようになる。日夫が「えりせんせい、お山行きたい」というのに刺激されて負けじと言い出した感じ。そんなA夫だが、母親には「今日はおかあさん帰ってもい

いよ」とか「昨日は楽しかった」と話している様子。緊張しながらも心が動き、それを言葉以外の表現で保育者に伝えようとする。

一日一日ほぐれていく心持ち、少しずつ声が出て話をするようになっていった。A夫の微妙な表現から彼の思いを感じ取ろうと、努力した数日である。小さな変化の過程を敏感にとらえることの大切さを感じた。

三歳児の保育時間は最初は一時間余り、決して長い時間ではない。しかし、その一時間に、保育者は一人ひとりの沢山の思いを感じ取ろうと実に多くのエネルギーを使い、凝縮した時を過ごす。子どもが帰ったあと、エネルギーを使い切ったような疲労感が残るのはそのためもあるだろう。また反対に、ちよつとした出来事から、いろいろな



事を感じ取り、子どもの思いに気持ちを馳せ、分かったと思える心地よさも沢山味わえる時期でもある。

### 名前を呼ぶ

S夫は、最初の二日間は、自分で靴を履き替え園庭に出て、砂利を拾ったり周りの様子を見たりして過ごしていた。拾った砂利を見せてくれるぐらいの関わりしもなく『気持ち安定して、自然にスタートしたのかな』と推測していた。三日目、S夫を含む四・五人と一緒に滑り台などを楽しみ『やっと、少し関わってよかった』と思っていた。翌日、母がすでに帰って少したった頃、お部屋で突然大声で泣き出す。抱き抱えるが耳が痛いほどの大きな声で泣かれる。教頭の助けもあって庭へ出て、ありを捕まえたりして気持ちを立て直す。次の日は、登園するとすぐ保育者の手

をしつかりと握り、ちよつと離れると「えりせんせい！」と呼んでくる。私はすぐに行かれない時には、せめて「はい、Sちゃん」と答えていた。

お庭に一緒に行きたいというS夫の求めにやっと応じて、手をつないで庭に出ると「えーりせんせい」と節回しをつけて何度も呼んでくる。その度に私も「Sちゃん」と、同じ節回しで答える。S夫とやつと少し気持ちが近づいたと感じるほんわり幸せなひとときだった。

私は、子どもの名前を心を込めて呼ぶことで、一人ひとりの子どもと保育者である私とのつながりを築いていく小さな手がかりになるのではと考えていた。入園の日から意識して、子どもたちの名前を何度も呼ぶようにしていた。子どもの側からも、先生の名前を呼ぶことは、同じような意味があるのかなと手ごたえを感じたやりとりだった。

## 話を聞く

入園式の日、小さい組の子どもたちは、一番前の席に座った。教頭先生が前に立ち、マイクで話をするので、W子は食い入るような視線で見ている。

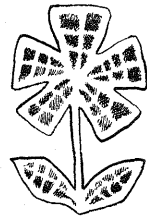
十日後、初めての発育測定で保健室に移動する。絨毯にぺたっと座った子どもたち。養護のM教諭が説明を始めると、目を皿のようにして微動だにせず話を聞いていた。初めての経験、何が始まるのだろうかと注目する子どもたちの思いが伝わってきた。その様子は何とも可愛らしかった。がそれ以上に何か強烈な印象を残した。幼い人達の新しい刺激を吸収する力強さ、「集中力」などという言葉では表現しきれないもって大きな力を感じた。

まっさらな子どもたちに関わる大人として、ど

んな語りかけ方をしているのか、その影響の深さをひしひしと感じたひとこまだった。本当に伝えたいことを、言葉を選んで伝えて行くことを心がけよう、たくさんの言葉をシャワーのように子どもたちに浴びせて、話を聞けない子どもたちにしてしまうことがないように、と自分に言い聞かせたのである。

## 一人ひとりを大切にすること

話はまた昨年のことに戻るが、M夫とのやりとりが思い出される。一月、年長児たちは白木の独楽（ひもで回すもの）に色をつけて、回せるようになりたいと一生懸命挑戦していた。R夫やS夫は、次々とひもで回せるようになってきたが、M夫はなかなか出来ない。M夫は出来ない理由を独



樂のせいにして、自分の独樂とS夫のをじつと見比べていた。M夫は「ここが、ちょっと長すぎない？」と私に訴えた。見てみると、確かに芯の棒のつきかたがほんのちよつと違うようだ。M夫のは一ミリ位上が長い。私は、そのことだけが原因ではないけれどと思いつつ「じゃあ、直してみよう」と材料室から小さなこぎりを探してきた。

私がおのこぎりで切るのをじつと見ていたM夫、終わって独樂を渡すと身体ごと弾むようにS夫たちの方へ走りだした。その時、ぱつときびすを返して「ありがとう」と笑顔でひとこと。

後から考えると、何ものこぎりで切るほどの事ではなくトンカチでちよつと叩けばよかったのだが、その時はとっさに思いつかなかつた。だがM夫にとって、方法が問題ではなく『棒の位置が変われば、僕も出来るようになるのでは？ だから何とかしたい』という彼の思いに、私があればこれ

意図的に考えずストレートに付きあつたことが意味があつたのではないかと思う。私にとつて一人ひとりを大切にすることかと思つた出来事のひとつである。

保育中のできごとを羅列する形になつたが、毎日の生活でこつた瞬間を重ねていきたい。保育の中で得た手ごたえや実感を糧に、今ここにいる子どもたちと大切に向き合つていきたい。

新しい生活の始まりには希望を持って意欲的になる。けれども一方で、すぐに慣れてしまつて鈍感になつたり独断的になつたりしてしまう。保育者としての暮らしが十年を越えて、私はこんなことも今更に慎重に考えたいと思つている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)